新学習指導要領に見る普通教育としての「職業教育」
――和光中学の農業体験学習から――

森下　一期

1　現代の中学生が求めているものは

今回の学習指導要領の改訂は行政側が打ち上げているように、完全学校５日制に対応したものである。５日制への移行についてすべての人の合意が得られているとは言えないようだが、大勢においてはそのように進んでいくだろう。私は、生徒たちが学校を相対化し、地域・社会での学び・活動の場を得ていくことは重要だと考えている。そうしたときに、授業時数など大幅な削減が必要となることはやむを得ないことである。というよりも、時間ではかる発想では、授業内容についても知識の量ではかる考えから脱却することはできない。

つまり、これまで、技術・家庭の週時数が２・２・２～３だったのが、２・２・１となってしまう、これほどの削減は不当だ、といった議論をしてもしょうがないということである。ちなみに、削減率（新の時数／旧の時数）を見たところ(幅が示されているものは少ない方で計算)、最も高いのは国語で、技術・家庭は音楽、美術よりも低く、ちょうど中間である。もちろん、もともと少ない、技術と家庭といった異なる教科をひとまとめにしている、といった批判はできるのだが、それはそれとしてなされればよいと思う。

ここでは、現実に進んでいる中で、現代の中学生が求め、また、身につけさせたい技術・職業の教育を考えることとしたい。

2　「職業」の教育を

中等教育においては職業や進路の教育は重要な柱の一つとなる。青年の自立を促していく上で、欠くことのできないものである。後期中等教育では専門に分化した職業教育も用意されるが、前期・後期を通して、普通教育としての職業に関する教育が必要であると考えている。新制中学校では当初、職業科、あるいは職業・家庭科が置かれていた。それが、1958年学習指導要領から技術・

家庭科となった。教科名から「職業」の文字が消えたわけである。「技術」を重視することはそれとして大切であろうが、大人の世界に一歩踏み込んできた中学生たちが、自分自身の問題として職業について学んでいくことは、進路を考える上においても、大人から見て「必要」になるというだけでなく、生徒自身自らの将来とも重ねながら関心を持つ。

これまで、「職業教育」と言うと狭い専門分野に限定して教えるととらえられる傾向が強く、早くからの分化に否定的な論調が多かったように思う。確かに特定分野の職業への就業をめざしての知識・技能の教育を早くから行うことは適切ではないだろう。しかし、だからといって職業に関する教育がいらないということではない。特に近代においては、子どもたちは職業世界から切り離されてきた。大人が営んでいる労働の姿を目にすることは極めて限られ、手伝いなどを通して手ほどきを受け、職業生活を体験的に学ぶといった場もなくなった。だからこそ、直接的な特定職業に向けた職業教育ではなく、普通教育としての職業教育を興していく必要があると考えてきたわけである。

ただ、中学校の教育の中で職業に関するものが全くないわけではない。まず、そこに目を向けてみよう。あらためて「学校教育法」の中学校の「教育の目標」をみると、次のような項目がある。

「二、社会に必要な職業についての基礎的な知識と技能、勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力を養うこと」。中段の勤労に関しては、学習指導要領では、道徳の章の中でふれるとともに、特別活動では「勤労生産・奉仕的行事」を設けている。また、後段の進路に関することも、総則の中の一項目として、「計画的・組織的進路指導を行うこと」を示している。それに対し、前段の「職業」の語を使った内容は社会科の公民分野に見られるのみである。「社会における職業の意義」とあり、教科書にもそれなりに載っている。ただ、学校教育法は「社会に必要な職業の基礎的な知識と技能」としているのであって、技能の部分は含められていない。それは技術科で、ということかと見ると、技術・家庭科に「職業」の文字はない。

先の社会科の公民分野においては、確かに「社会における職業の意義」には触れられているが、人間にとっての職業の意義は表現されていない（日本書籍版によっているが）。働きがい、仕事における生きがいなどが抜け落ちている。この点を強調しすぎると「勤労」にもっていかれる恐れはあるが、現代社会における労働経済分野における問題点は比較的ていねいに言及されているものの、トーンは「困難があるが働きつづけよう」といった形だけのものとなっている。

つまり、現代社会が抱える困難を認識しつつも、労働、職業に自らのアイデンティティーの実現をかけて展望を持とうといったものではないのである。

なお、私は、労働と職業という2つの用語を使っているが、その両者の関係は次のようなものではないかと考えている。労働は価値創造の営みそのものである。ただ、その価値がその人間の生活を支えるものとなるかどうかは関わらないことである。つまり、労働は使用価値を生み出すのだが、労働している人間にその行いの意義と意味を納得させ得ても、それで食べていけるかどうかは別の問題であるということである。それに対し、職業はその人が身につけた技能を発揮することにより自らの技能に納得したり、さらに高めようとしたりして、やりがいを感ずると同時に生活を成り立たせることを追求しているものであろう。つまり、生活している人間の営みそのものを「職業」は意味しているととらえている。

そのような観点から見ると、学習指導要領、教科書は、総体としての人間の営みである職業生活を分断して示し、その結果として人間の生きざまが浮かびあがらず、抽象的な「職業」や「労働」あるいは「生活」が文字面に出てくるだけとなっている。唯一、可能性があるのは「勤労生産・奉仕的行事」であって、ともすると「勤労」が強調されたり、「奉仕活動」に傾斜する恐れはあるものの、直接的に「職業人」と接し、そこで（技を介するとともに人間的に）「職業」を生活ぐるみで知り、感じ、体験することを可能としている。近年、比較的多く実践されている「職場体験学習」は重要な取り組みとなっている。教育科学研究会の労働と教育の分科会には毎年といっていいほど中学校の労働体験学習の実践報告がなされている。また、進路指導研究会の機関誌にもその実践が掲載されている。なお、兵庫県では全公立中学校が職場体験学習を実施したという（朝日新聞　1998年11月30日）。これについては、トップダウン形式で行うことに現場での疑義が出されているようだが、私は、前向きに受け止め、どう対応したら真に生徒のものとなるかを提言していくべきだと考えている。そういった職業体験自体を零から企画することはなかなか大変である。行政サイドで設定するなら、それを活用すべきである。私は、極端なものを別とすれば、職業体験はそれ自体が教育的な意味をもっていると考えている。そこには、職業に関わる人間自身に直接的に手と手をふれあい、それを通して伝授されるので、言葉だけとはまったく異なる関係が生じるのである。

もちろん、職業体験は、普通教育としての職業教育の一部であって、そのすべてではない。社会科での労働経済・労働法関係の学習も欠かすことはできな

いし（教科書に記載された内容が十全になされるなら、かなり学習することになるが、実際にはどうだろうか）、技術・家庭科では人間にとっての労働・職業の意義、労働の組織の学習を加えたらどうかと考えている。その際、就業人口の６割以上が第３次産業に従事するようになっているのであるから、この分野についての教育内容に関して検討していくことが必要となっていると思う。ここではその重要性を指摘するにとどまってしまう。

本来ならば、この「職場体験学習」の実践を分析検討しなければならないが、ここでは、私の職場での実践の紹介にとどめさせていただきたい。

3　和光中学校での農業体験実習

和光中学校では24年前から労働実習を主体とした学習旅行を実践している。最初は飛騨高山で家具工場、農業・畜産、陶芸、わら細工など多様な実習を行った。翌年は秋田のわらび座を宿舎とし、農業実習を行った。その後何年か交互に行った後、秋田に定着させ、民舞の練習を加えて実施してきた。昨年度でこの秋田での学習旅行は20回を数えることとなった。事前の学習で、日本の農業について学び、技術科では麦の栽培実習と学習を行って準備をしている。一方、夏休みには職業調べに取り組み、新聞形式で発表し合っている。

実施は９月下旬だが、最初の１、２日はわらび座でソーラン節、太鼓などの練習に取り組み、「祭りづくり」を発表し合う。最初は身体表現することに躊躇が見られ、恥ずかしがっているが、わらび座の方の全身を使っての表現と指導、そして太鼓の響きなどに引き込まれ、「やっているうちに恥ずかしいという気持ちはうすれて、一生懸命やるようになっている自分に気づいた」と言い、「このわらび座の踊りや太鼓によって、一生懸命やるというのが楽しく、はずかしいことではないということがわかった」と多くの生徒が述べている。

３日目から各農家に班ごとに分かれて実習に向かう。１班５～６人で、１クラス７班。４クラスあるから、28軒にお世話になっている。中には連続して受け入れてくれている農家もある。実習は３日間行うが、この間に生徒たちは大きく変わる。大半の生徒が出かける前はなんで金まで出して働きに行かねばならないかと嫌がっているが（最近は楽しみにしている生徒も多くなっている）、ときは「人生にそう何度もできないような体験ができて、本当に良かった」といった感想となる。農業問題、環境問題、人の生き方、人のつながり等々といったことを体を通して学び・考え、「秋田では、色々な人とのふれあいがあったし、色々な体験ができました。行ってよかったと本当に思います。秋田はず

っと続けてほしいです。弟にも体験させてあげたいし、自分の子どもにも体験させてあげたいです」「社会の問題、環境の問題、人とのつながり……。色々な種を心に育てようと思う。いろいろな嵐がくるだろうけれど、そんなことを教えてくれた秋田にはすごく感謝している」と述べる生徒もいる。

この秋田学習旅行で、農業という職業を介した人との関わりに生徒たちは最も感動している。特に農業という職業は生活そのものだから、「人」を感ずるのだろう。職業体験の最も重要なところは、この「人」がそこに存在することだと思う。「人」からきり離された知識や技能だけではこれほどまでに生徒を感動させることはできない。一方、「人」だけでもダメである。農作業があり、民舞や太鼓の練習があるから具体的な「人」との感動的な出会いとなるのだろう。最後の夜は「お別れ感謝の会」を、全ての農家の方に集まってもらって行うが、それぞれの農家を紹介する生徒たちは涙は出すまいと決めていても涙、涙となってしまうようである。卒業した春休みには、半数を超える生徒たちが秋田を訪れているようである。少し度が過ぎないかと心配しているほどである。

秋田での取り組みが20回を超えているが、これだけ続いてきていることは、受け入れ側でも意味を持っていたということが言える。20回記念イベントの中で農家の方が話されたが、農業に関心を持つ都会の中学生がいることが自分の子どもにいろいろな影響を与えた、ということである。実際、受け入れ農家の子どもがこの取り組みを脇に見て、農業の道を歩むようになったと話している。職業体験の取り組みはこのような意味合いを持っているのである。ちなみに、社会に出て数年してから、農業をはじめようと決意した卒業生がいるが、根っこのところではこの学習旅行の経験があるように思うと本人が語っていた。

4 「総合的な学習の時間」の活用を

さて、そういった意味での総合化された「職業」を経験し、学習の対象とする場として、「総合的な学習の時間」の活用が考えられる。

小・中・高通した例示は、国際理解、情報、環境、福祉・健康、の４つだが、高等学校学習指導要領には、「イ、生徒が興味・関心、進路等に応じて設定した課題について、知識や技能の深化、総合化を図る学習活動。」「ウ、自己の在り方生き方や進路について考察する学習活動」、が取り上げられている。

２．で述べているように、職業に関する事柄は知識も必要とするし、技能も問題となるが、人に関わることであるから、教科に分化しがたいものを持っている。まさに、「総合的な学習」として取り上げることにふさわしいことでは

ないだろうか。和光中学校でも一昨年から「総合学習」各学年週２時間を設け、実践しているが、３年生では秋田学習旅行を含み込んで、「働く」「生きる」をキーワードにして取り組んでいる。年度によってテーマ設定は異なるが、昨年は「生きること、働くことの意味を考えよう」として取り組んでいる。

5 「技術・家庭科」に即して

今回、技術分野・家庭分野とされ、男女共通に学ぶようにされていることは（選択教科として行う部分は別だが）、この教科の歴史からするなら大きな変化といえるだろう。現学習指導要領では、内容の取り扱いにおいて「生徒の特性等」に応じてということで、男女が異なる領域を学ぶ余地を残していた。その「生徒の特性」の言葉は消え、分野ごとの４項目の中から１、２の選択ということはあるが、全ての生徒に履修させるということにしている。これにより、かなりすっきりしたといえる。技術分野、家庭分野と区分することにより、男女別なくそれぞれを学ぶわけだから、それぞれの特質を出した授業をすればよいということになる。無理に技術と家庭を結びつける必要はないとも言える。

さらに、分野の内容を、「技術とものづくり」と「情報とコンピュータ」と大きく区分けし、細分化した領域の時間数を指定するといったことが取り払われた。教科時数が減少する中での対応策かも知れないが、大綱化したことはそれだけ、各教師の判断が生かされる余地が増えたと言える。これも歓迎すべきことだろう。科学技術が発達すればするほど、専門分野は細分化され、蓄積される知識も技術も大量になっていくのだから、それに合わせて必要となる基礎的知識・技術という発想で考えると学習内容はより細分化、増加していくことになる。あれもこれもといった発想ではなく、技術分野でのベースとなるところに絞るか、典型と考えられるものを選択的に選ぶか、のどちらかであろう。

紙数の関係で「情報とコンピュータ」が必修となる問題について触れることはできないが、教育内容を大きくくくってとらえるようになったのだから、先に触れた「職業」についての教育も考慮に入れて、「総合的な学習」の時間の取り組みとも連動させて、大胆に技術・家庭科の内容を学校ごとにつくり出していくことが求められているのではなかろうか。現代に生きる中学生たちは、今現在の自分の生活、将来の生活と関わるところで学ぶ意義をつかんでいくのではないかと思う。そういった意味でも「職業」を介して生き方を学び、つくり出していくことができるのではないかと思うが、いかがだろうか。

（東京・和光中・高等学校）